法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

琉球方言の分布図:母音体系・ハ行音・力

行音 • 夕行音

中本, 正智

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
琉球の方言
(巻 / Volume)
5
(開始ページ / Start Page)
153
(終了ページ / End Page)
199
(発行年 / Year)
1979-10-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00012751

琉球方言の分布図

一母音体系・ハ行音・カ行音・タ行音ー

中本正智

目 次

琉球方言の母音体系の分布

ハ行音 - 花・肘・蓋・鐴・骨・ハ行子音の総合図

カ行音 ― 風・肝・傷・口・煙・これ・カ行子音の総合図

タ行音 ― 旅・乳・綱・手・鳥・タ行子音の総合図

琉球諸方言の音韻については小著『琉球方言音韻の研究』(法大出版局)において、奄美・沖縄・宮古・八重山・与那国の主要5方言の構造を比較検討し、これを概観するとともに音韻の変化過程を考察した。小著では全体に琉球諸方言の音韻の法則的な側面をとりあげたのであった。

音韻の変化は極めて法則的である一方においては、音韻的環境により、また語の出自や中央文化の波及関係の相違により、語ごとに異なる面をもっている。琉球方言の歴史的過程を明らかにするには、語ごとに、その音韻現象を分析して琉球全域の分布状態を考察することが重要となる。

母音体系とハ行音・カ行音・タ行音の分布図をえがいてみた。母音体系は一語一語の変化を考察するときのバックボーンとして重要である。ハ行・カ行・タ行の子音 p k t は、破裂音という音韻的性質を同じくする面をもち、その変化も相互に関連して行なわれるところがある。音韻の相関性を無視するわけにはいかない。

以下、それぞれの分布図について考察しよう。

「琉球方言の母音体系の分布」

琉球方言の母音体系は、推移型と構造を組み 合わせて分類することができる。

推移によると

I型−イ段母音は変化しないのでエ段母音 が $e \rightarrow \ddot{i}$ ($\rightarrow i$)のように変化して いるもの。

I型 - イ段母音も i → i (→ i) のように変化し、工段母音も e → i のように変化しているもの。

のように分類できる。 | 型は奄美・沖縄全域の 北琉球に分布し、 | 型は宮古・八重山・与那国 全域の南琉球に分布している。

構造によると

A型-5母音(i・e・a・o・u)の他に ïëをもつもの。

B型-5母音の他に iをもつもの。

C型-5母音のもの。

D型-3母音(i·u·a)のもの。

のように分類することができる。 A型は, 「型の中では奄美大島・徳之島の全域に分布し, 『型の中では波照間島に分布している。B型は,

I型の中ではわずかに喜界島北部と沖永良部島

国頭に分布し、『型の中では圧倒的に多く,宮古・八重山に分布している。C型は、『型の中では沖縄全域と与論島・沖永良部島・喜界島南部に分布し、『型の中では八重山の黒島・鳩間島・西表島西部に分布している。D型は与那国島だけに分布している。最近では共通語の影響で e・oを取り入れ5母音の構造になりつつある

琉球方言の母音体系が歴史的に北琉球の「型と南琉球の I型に大きく分かれていった様子が分布図でよみとれるのであるが、これがどのような体系から、いつごろ分かれたかについては、多くの語をあげてさらに考察を深めなければわからない。

ハ行音

「花士

p音をとどめるパナ系は南琉球に勢力をもって分布している。波照間島・新城島・小浜島・石垣島川平・西表島には panaがみられる。この地域の方言に無声子音と n・m・rにはさまれた母音が無声化する現象が起こっているためである。

北琉球で p音をとどめる方言は、沖縄本島北部の、とくに名護・本部半島・伊江島を中心にまとまった分布相をみせる。沖縄本島の周辺部は北端の奥・安田に、東南部の津堅島・久高島に点在している。そのほか、奄美では与論島がもっともさかんであり、喜界島北部と奄美大島佐仁にもわずかに見られる。

φ音をとどめるファナ系は北琉球の p音の周 辺部にみられる。

h音は北琉球に圧倒的に多く,沖繩本島中・ 南部地域と沖永良部島・徳之島・奄美大島・喜 界島南部をおおっている。 語末母音の長音化をみると、沖繩本部の名護・本部半島・伊江島の pana:、 伊是名島の фana:、 伊平屋島・沖永良部島・徳之島西部の hana:のように一つの勢力圏をもっていることが注目される。この長音化はアクセントと 関係する現象のようである。

「肘」

p音のすがたは、ほぼ「花」と同じである。 p音をとどめるピジ系は南琉球に多く、北琉球 では沖縄北部と与論島・喜界島北部・奄美大島 佐仁に分布している。沖縄北部で p[?]idgi:のよ うに無気喉頭化音に変化しているのは、「花」 の p音と異っている。これは e→i、o→uと いう母音の高音化によって本来の狭母音音節の 破裂音が無気喉頭化の現象を起こしたためのも のである。

伊江島では tidzi, 与那国では tj[?]i diŋka の ように変化している。

奄美の与路島や請島では母音の変化に伴って xët, xï tf のように軟口蓋摩擦音に変化し ている。

φ音をとどめるフィジ系は p音の周辺に多く 分布している。

ç音のヒジ系は沖縄中・南部を中心に、沖永 良部島・徳之島・奄美大島・喜界島南部など、 北琉球に勢力がある。 Φ→ Çの口蓋化が急速に すすんでいるのは、母音 iの影響によるもので ある。

徳之島には sïdgïのようにサ行音化している 方言がみられる。

「人」の語頭音 pi は「肘」の pi よりも変化がすすみ、北琉球の多くの方言で脱落現象を起こしていることは、すでに「首里王朝の言語(2) | (本書所収)で考察した通りである。

「蓋」

p音のすがたが他の段と異なる南琉球は「花」にしても「肘」にしても p音の優勢地域であったが、「蓋」においては p音が一例も現われない。

南琉球では,ウ段音が $pu \rightarrow fu$ の変化を経て いるからである。この変化は,この地域の母音 変化と密接に関係している。これについては中本 1976; p. 238 を参照されたい。 f uta は宮古全域に分布し,八重山では $fu \rightarrow \phi u$ の変化によって ϕu taになったものである。

北琉球の p音のすがたは「花」などとほぼ同じである。ただ恩納や久高島で無気喉頭化音になっている点が異なる。北琉球の фuta は南琉球の fu→ фuの変化とは異なり, pu→ фuの変化を経たものである。

喜界島湾では語頭音が脱落して t^7a になり、 与那国島でも同様に t^7a : となっている。

「鐴(へら)」

p音のすがたは「花」と類似している。 φ音をとどめるフェラ系が奄美大島・徳之島に勢力をもっているのが注目される。これはエ段母音が中舌母音 ïになったため, φ→ çの口蓋化の変化がおくれたと見ることができよう。すでに見たように「肘」において φ→ φの口蓋化が急速に起こっていることと対比されよう。

口蓋化された Çiraは、 沖繩本島中・南部や 沖永良部島で多く現われている。これらの地域 にはエ段母音が iに変わった方言が分布してい る。

「骨」

p音のすがたは「花」と類似している。 p音 のほかはすべて φ音のフニ系に変化している。 これは u母音の唇音性によるものである。 u以 外の母音への変化がないので、 çなどの子音も ない。

「ハ行子音の総合図」

以上は、ハ行音について各段から一語ずつと りあげて分布図をえがいたのであるが、さらに 多くの語を参考にして総合図をつくってみた。

A1は全段で p音をとどめているが、イ段・ ウ段の狭母音音節で無気喉頭化の現象が見られ る。これは沖縄北部に勢力をもっている。

A2は A1 に類似するが、広母音音節のア段 ・エ段・オ段で pの破裂性がやわらかくなって φに近づいているすがたである。これは久高島 や喜界島北部に分布している。

A3はイ段・ウ段で喉頭化音を失って全段が p音になっているものである。奄美大島佐仁・ 与論島・沖縄津堅島に分布している。

A4はイ段で p→ tの変化を経ている。これは伊江島だけでみられる。

A5 は A1 のすがたがくずれたものと察せられる。イ段とエ段の母音 iの前で p⁷ であり, 他の段ではすべて φに変化している。沖縄本島 北部にみられる。

以上はハ行 p音をいずれかの段でとどめている構造である。

A6・A7は p音を失ったすがたである。沖 永良部島などは、カ行子音が h音化しているに もかかわらず、 p音も h音化している地域であ る。沖縄中・南部と奄美大島・徳之島は、カ行 子音が kのままで、ハ行 p音を失っている地域 である。

B音は南琉球に分布する構造であるが、ウ段ではすべて p音を失っている。

B8はウ段子音が fで, 他の段では p音をと

どめている。これは宮古に勢力がある。

B10は f が φ に変化したもので八重山に勢 力がある。

B9は B8のすがたから p音を失ったすがたで、宮古の池間島・佐良浜・西原にある。

B11は B10から p音を失ったもので,与那 国島にある。

ハ行子音の変化はカ行子音との相関において 考察を深めねばならない。

カ 行 音

「風」

k音をとどめるカゼ系がもっとも基本的である。

k音が h音化しているハゼ系は沖縄北部を中心にその属島をつつみこみ、与論島・沖永良部島・喜界島にひろがる一大勢力圏を形成している。奄美大島では佐仁だけに見られる。沖縄南部の久高島も h音である。

久米島の鳥島にも hadi がある。鳥島は本来, 久米島の北東方,徳之島の西方に浮かぶ小島で あるが,その住民は大正期に久米島具志川村の 沿岸部の仲泊に隣接したところに寄留した。現 在でも久米島の鳥島方言は隣りの仲泊など久米 島本来の方言とは異なっている。鳥島の方言は むしろ沖縄北部圏の方言に近いといえる。

「風」の第2音節をみると、その子音が破裂音 dである方言と破擦音dz,dgなどである方言とがある。破裂音 dをもつ方言は喜界島と奄美大島南部に集中し、徳之島の東北部、与論島を中心に沖永良部島西部と沖縄本島北部、沖縄南部では栗国と久高島、宮古の西側の周辺部、多良間部、与那国島に分布していることになる。

沖縄糸満などでは「風」のことを 7iki という。これは「息」に対応する語である。窓から

ら取り入れるのは「いき」であって「かぜ」で はない。沖縄では「かぜ」は「台風」の意味に ずれている場合が少なくない。

「肝!

k音をとどめるキモ系が基本的なものである。 喉頭化音の k^9 は沖縄北部と奄美大島でさかん である。

kが破擦化したチム系は沖縄中・南部を中心に、本部半島と伊江島・伊是名島・伊平屋島・沖永良部島東部・喜界島南部にひろがっている。これは、おもろ時代から首里を中心にさかんに起こった口蓋化現象の流れをくむものである。南琉球では kの破擦化は少ないが、池間島・伊良部島・宮古島東部の保良に tsïmu がみられる。これは首里を中心に起こった口蓋化現象と直接関係するものではない。おもろ時代の口蓋化現象は宮古・八重山の方言には波及しなかったことがわかる。

k→ hの変化がさかんである沖繩北部においても, イ段の「肝」の場合には k→ çになる例はみられない。

与那国で k⁷imu が現われることもあるが, tf⁷imu が本来の与那国方言の語形である。 tf⁷imuguti(胸)の語形をみてもそれがわか る。最近では喉頭化音の乱れが起こっている。

「傷」

k音をとどめるキズ系が基本的なものである。 喉頭化音の k^7 は奄美大島でさかんである。徳 之島・喜界島・沖繩北部にも点在する。

「肝」では破擦化 k→tfの例が多く現われたが,「傷」では破擦化がほとんどみられない。

宮古方言ではキに対応する音韻は kï であるのに、「傷 | の語頭音は ki であって kï にな

らない。これについては拙論「南島方言の概説 」 を参照されたい。

$\Gamma \square \perp$

北琉球では k音をとどめるクチ系が分布し、 南琉球では $ku \rightarrow fu$ の変化を経た宮古方言と、 さらに $ku \rightarrow fu \rightarrow \phi u$ の変化を経た八重山方言 が分布している。与那国では語頭音が脱落して t?i: または t?ibuni になっている。

「煙」

琉球全域がほとんどケブシ系で統一されている。 k→ cの変化によってヒブシとなるのは沖 細北部と沖永良部島・喜界島である。

ケンブシ系は与論島にみられる。

宮古では第2音節が fu または vに変化して kifusï, kivsï のようになる。

「これ」

k音をとどめるクリ系が基本的である。 k→ фの変化を経たフリ系は沖縄北部・与論島・沖 永良部島・喜界島・奄美大島佐仁に分布してい る。

「これ」の第2音節の r音が脱落して kuiとなっているのは宮古島にまとまった勢力として分布している。

ウリ系も点在している。これは「それ」と「 これ」との意味区分の問題とかかわるものであ る。

「カ行子音の総合図』

カ行子音のもっとも基本的なすがたは A1 である。 $e \rightarrow i$, $o \rightarrow u$ の高母音化によって本来のイ段・ウ段が k^{9} のように喉頭化しているものが多い。奄美大島・徳之島に大きな勢力をと

どめている。

A2はイ段が破擦化しているもので、首里を中心とする沖縄中・南部に大勢力として存する。 A3は、これがさらに摩擦化したもので金武の 周辺に分布している。

A4から A8 までは広母音音節で k→ hの変化を起こしたもので、沖縄北部及びその属島・与論島・沖永良部島・喜界島に分布している。これらの中にはイ段子音が破擦化したものもある。

南琉球ではウ段音で ku→ fu(→ φu)の変化を起こしている。これはハ行音の pu→ fu (→ φu)の変化と呼応している。この変化は母音変化によってひきおこされたものと考えられる。

南琉球のうち、キが tsïになる方言は宮古の 池間・伊良部島・来間島・宮古東部の保良など 周辺部に見られる。波照間島・竹富島では摩擦 音になっている。

南琉球では k→ hの変化は少なく, 黒島・新城島・波照間島にわずかに見られるだけである。

与那国島は本来,八重山方言の流れをひくも のであるが,狭母音音節がさかんに脱落する。

タ行音

「旅」

t音をとどめるタビ系がほとんどである。無 気喉頭化音は現われない。 tがサ行音化したサ ビ系は沖繩北部の佐手・宇嘉にわずかに見られ る。久高島の rabi はサ行音と同類と見られる。

「 乳. |

破裂音をもつ tixがわずかではあるが沖縄北部に見られる。主流は破擦音 ts または tfである。無気喉頭化音は奄美大島・喜界島・徳之島

・沖永良部島・沖縄北部にまとまった勢力としてある。

中舌母音をもつ形は宮古・八重山が中心である。ただし、徳之島でも中舌母音をもった ts^7 i: が現われる。

∫i: は沖繩北部の津堅島・宮城島や八重山 黒島・鳩間島などに現われる。

「緺」

t音をとどめるティナ系やトゥナ系は奄美大 島南部にまとまって分布し、喜界島・沖縄北部 にも分布している。これらはすべて無気喉頭化音 音でもある。

t音が破擦化しているチナ系とツナ系が主流をなして分布している。そして与論島と沖縄中・南部を除く地域では無気喉頭化音が存する。 喜界島では ts⁷unaのように, u母音が変化

宮古・八重山では tsinaのような形が多い。 宮古大神島には kinaがあるが,この方言では 中舌母音 iがかなり u母音寄りに変化したため に,それにひかれて $ts \rightarrow k$ の変化を起こした ものである。

していない形がみられる。

tが摩擦化したシナ系は伊江島・津堅島・宮 城島・黒島などに点在している。

与那国島・多良間島の nna, 池間島や沖繩 粟国島の nna などは語頭音が脱落している。

「手」

t音をとどめるティー系が基本的である。無 気喉頭化音は現われない。奄美大島・徳之島で は中舌母音をもつ tï 及び tï:が主流をなし, 他では ti:である。

口蓋化してtfになっているのは、沖縄奥武・ 宮古保良・友利などでみられる。 摩擦化したシー系は沖縄北部や波照間島など にみられる。

「鳥」

語頭音は圧倒的に tである。無気喉頭化音が 見られないのは注目してよい。

わずかではあるが沖繩北部の佐手・宇嘉などに suiが見られる。久髙島では ruiである。

「鳥」の第2音節の「り」が r音をとどめている方言は奄美大島に圧倒的に大く,喜界島と徳之島の一部にも見られる。さらに八重山と宮宮の多良間島に分布している。 r音がこのように琉球の北端と南端に分布しているのは注目してよい。おそらく r音の脱落は沖縄本島中・南部からはじまり、その周辺地域へと波及していったであろう。

特殊な語として西表租納にはググ系が、与那 国島にはミタ系がある。

「タ行子音の総合図」

イ段とウ段は破擦化している方言が圧倒的に多い。そして北琉球では無気喉頭化音の t^7 , t^{9} , t^{9} , t^{9} などが現われるのに対して、南琉球では与那国島以外ではほとんど現われない。

タ行音については小論「タ行音の構造的推移」 を参照されたい。

以上の母音・ハ行音・カ行音・タ行音におけるいくつかの語についての分布層の考察から次のことが明らかになった。

沖縄中・南部の地域は比較的新しい層に変化し、北端の奄美・沖縄北部と南端の宮古・八重山は比較的古い層をとどめている。これは琉球王国時代以来、沖縄中・南部が文化・政治の中心であり、外来の文物の摂取の要地であったこ

とと関係がある。

比較的に古い層

- (1) イ段母音とエ段母音の区別。奄美大島では i / i で区別し、宮古・八重山では i /i で区別している。
- (2) ハ行 p音の残存。
- (3) p・k・t・tf・tsの無気喉頭化音。
- (4) 宮古・八重山の pu→ fu, ku→ fu の 変化。

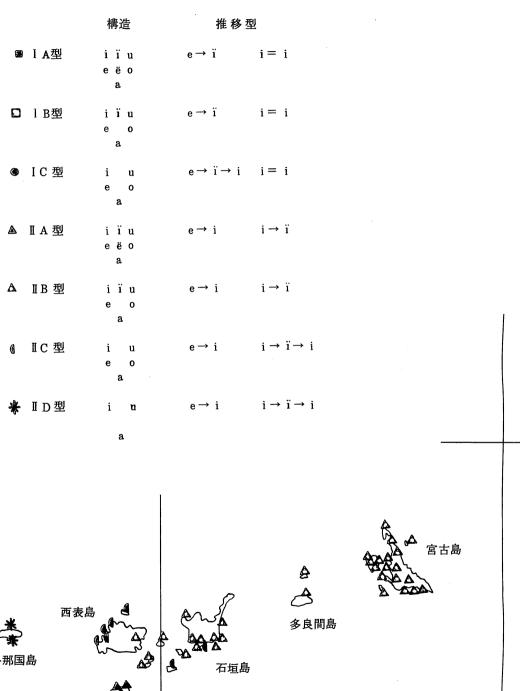
比較的に新しい層

- (1) イ段母音とエ段母音の区別の消失。沖繩本島を中心に与論島・沖永良部島・喜界島 に及んでいる。
- (2) ハ行子音の摩擦音化。 p→ φ→ h,p→ çなど。
- (3) 無気喉頭化音の消失。
- (4) イ段における kの口蓋化。
- (5) 「鳥」の r音の脱落。

参考文献

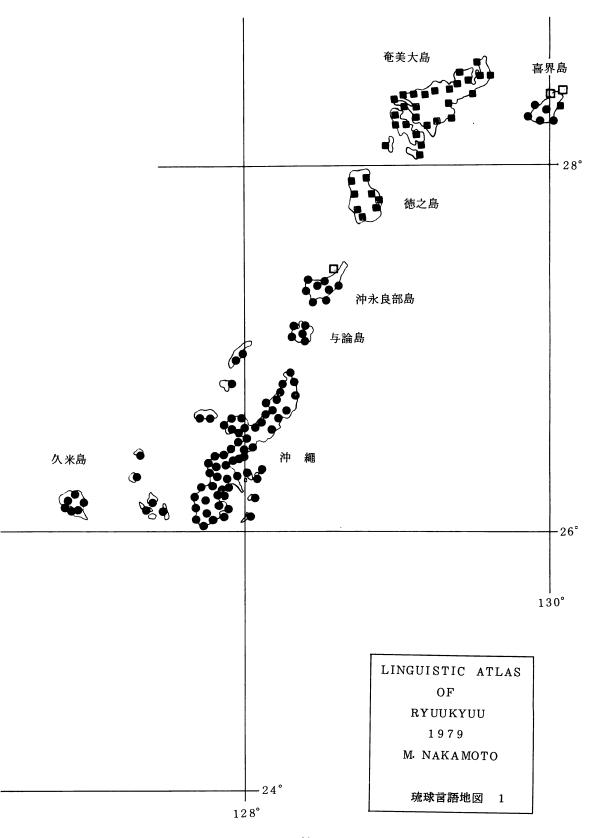
- 1934 「国頭方言の音韻」仲宗根政善, 『方言』4-10
- 1976 『琉球方言音韻の研究』中本正智, 法政大学出版局
- 1976 「古代ハ行 p音残存の要因 琉球 に分布する p音について — 」中本 正智, 『国語学 』107
- 1977 「 タ行音の構造的推移 」中本正智, 『人文学報 』117
- 1980 「南島方言の概説」中本正智, 『講 座方言学』

琉球方言の母音体系の分布

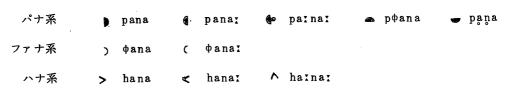


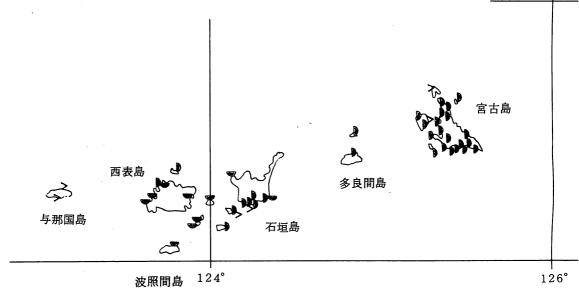
波照間島 124°

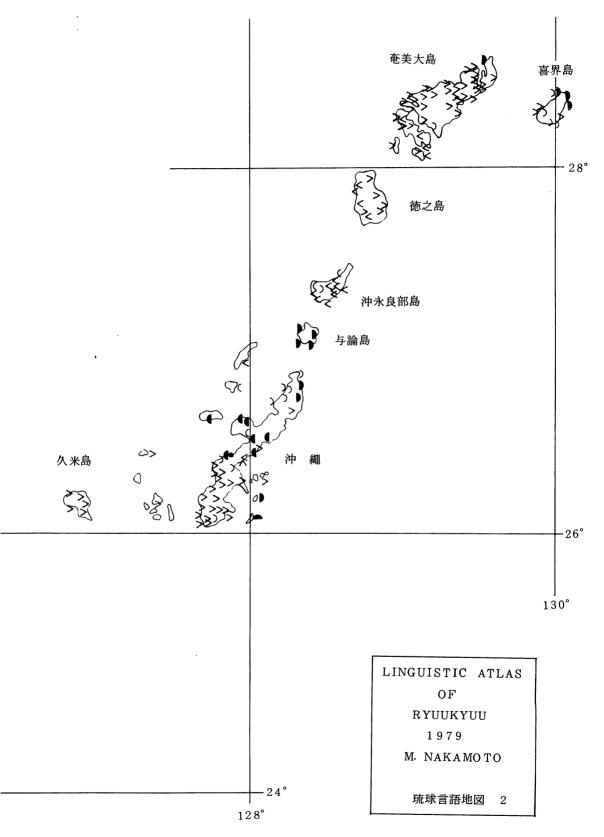
126°

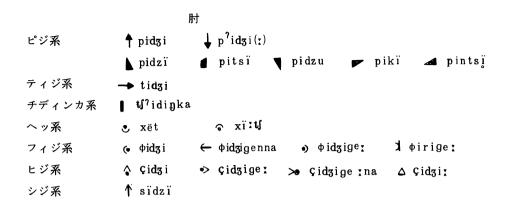


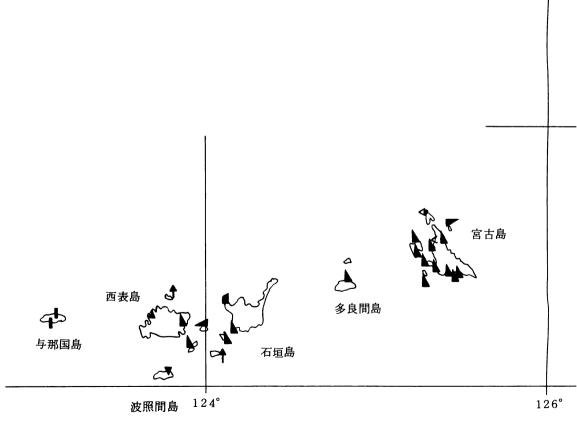
花

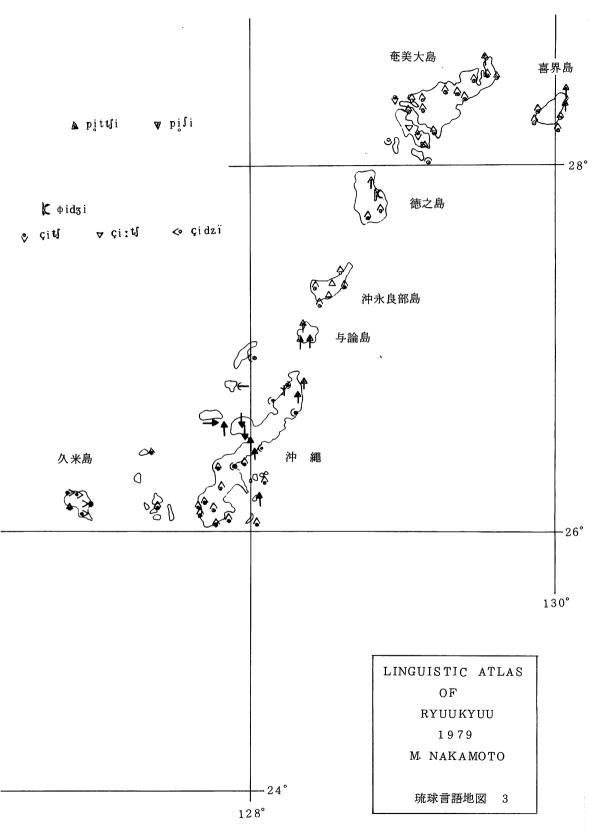


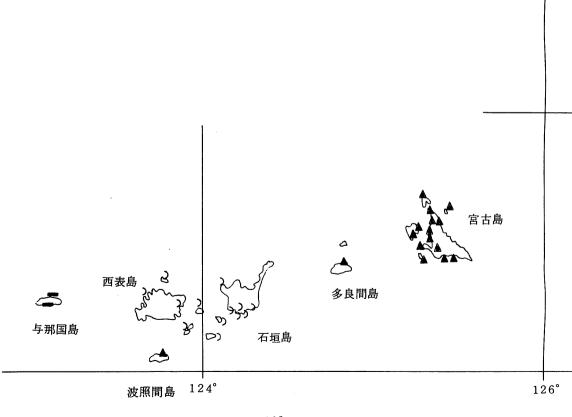


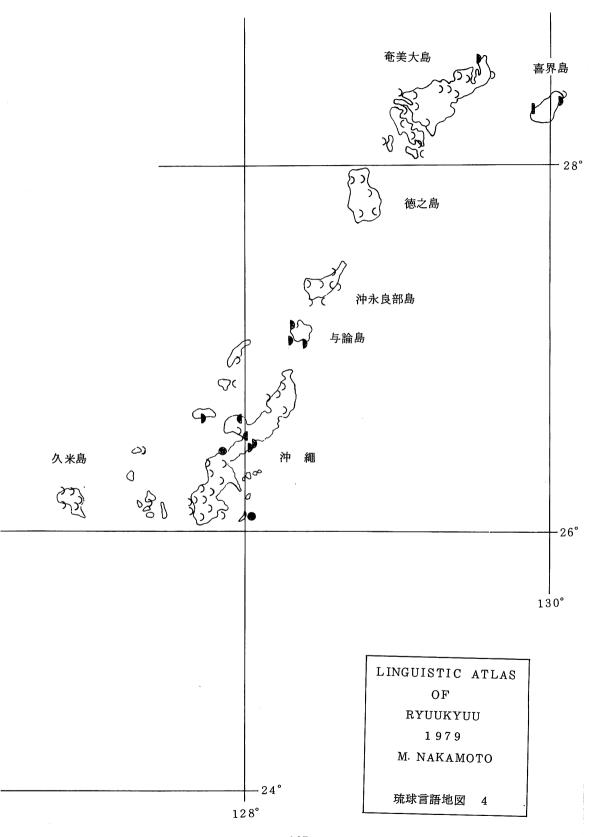






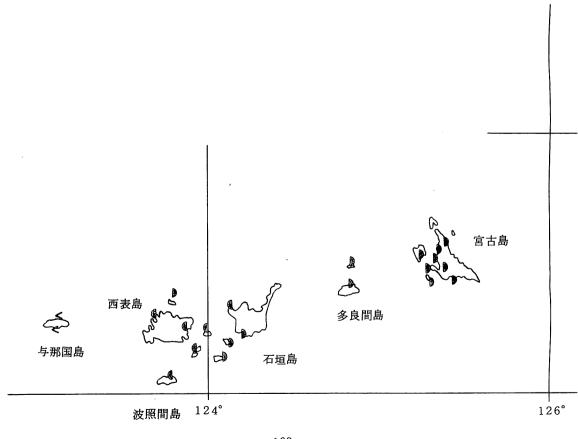


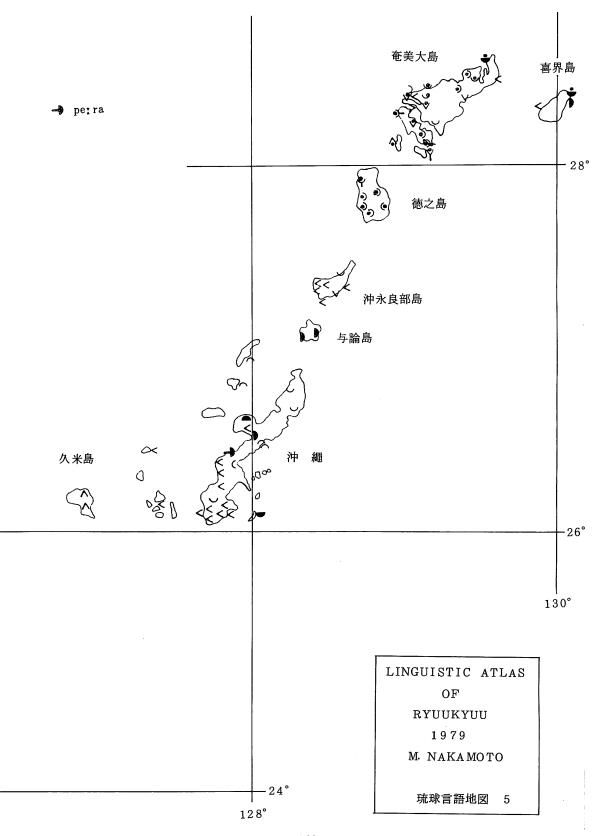


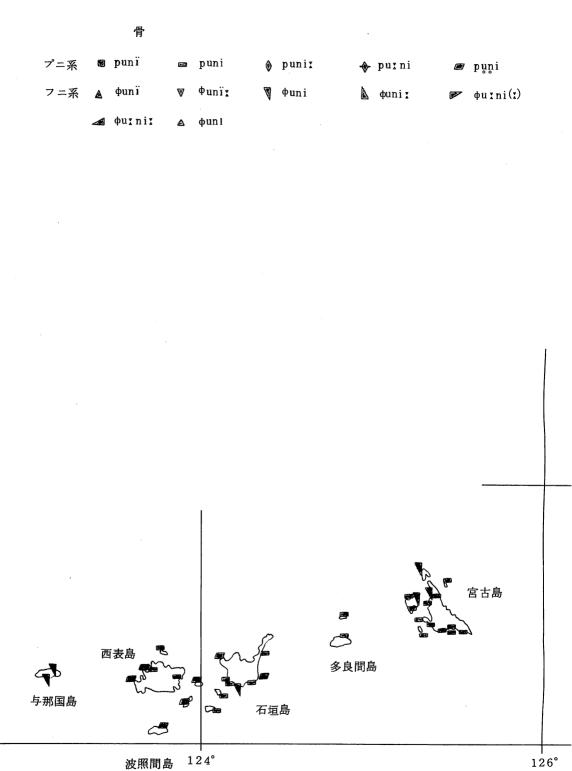


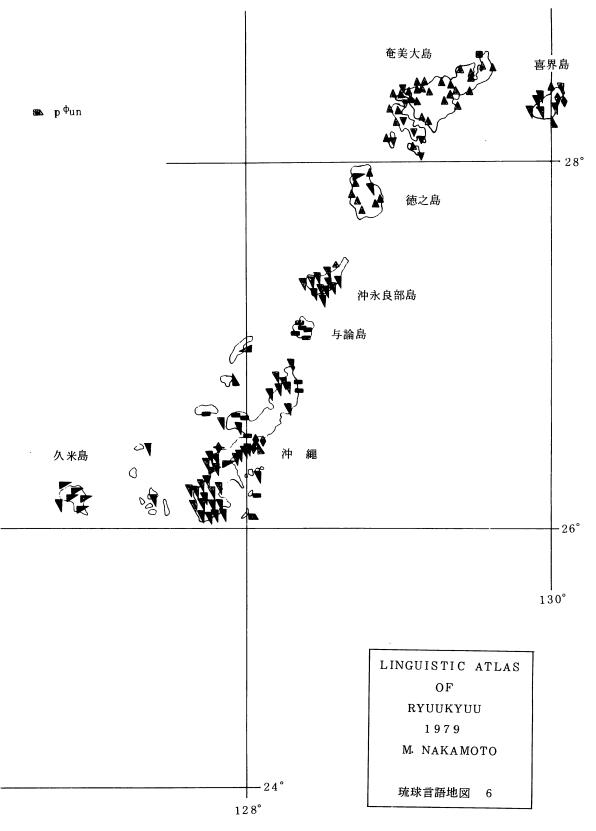






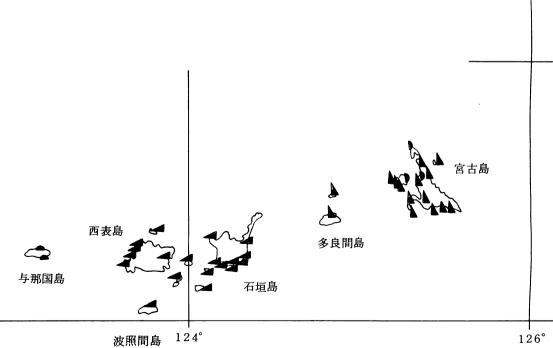


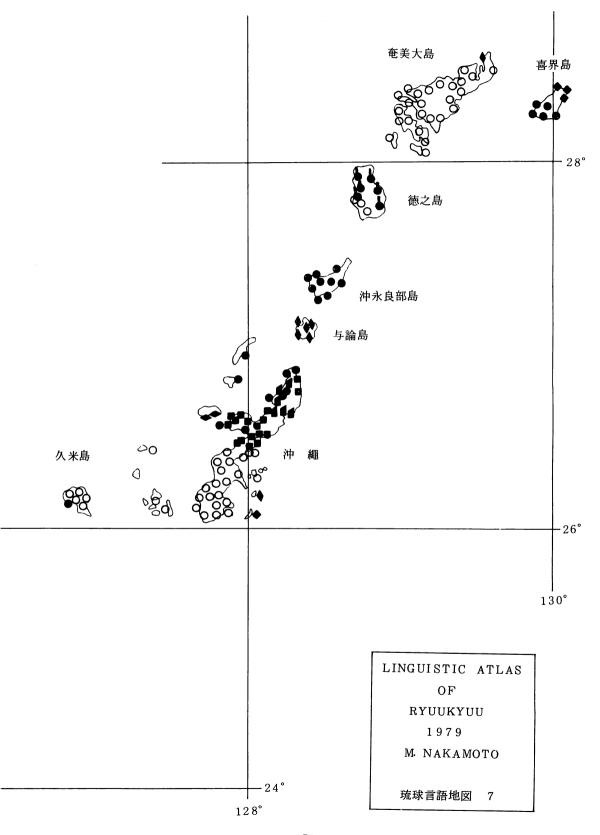




ハ行子音の総合図

		•	•	•	1	•	0	•	L	Ð	4	a
	A 1	A 2	А 3	A 4	A 5	A 6		A 7	B 8	В 9	B 10	В 11
ア段	p	\mathbf{p}^{φ}	p	p	ф	φ h	ф h	ф h	p	h	p	h
イ段	p?	p۶	p	t	pγ	ф ¢	ф Ç	ງ ຮ	ps	Ç	ps	ts?
ウ段	pγ	p٦	p	p	ф	ф	ф	ф	f	f	ф	ф
エ段	p	$p^{\dot{\Phi}}$	p	p	p٦	ф h	ф h	ф h	p	h	p	h
才段	p	$p^{\dot{\varphi}}$	p	. p	ф	ф h (カ	ф h (カ	ф h	p	h	p	h
						(カ行 h)	(カ行k)					





風

カゼ系

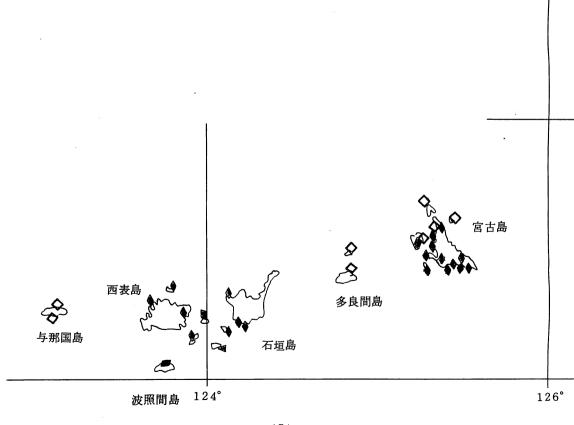
- 🗟 kade 🌘 kader 🗖 kadi 🔷 kadi
- 🛢 kadze 🐞 kadzeː 🗓 kadze 📾 kadzeː
- 🕯 kadzë 🖁 kadzï 😑 kadzï:

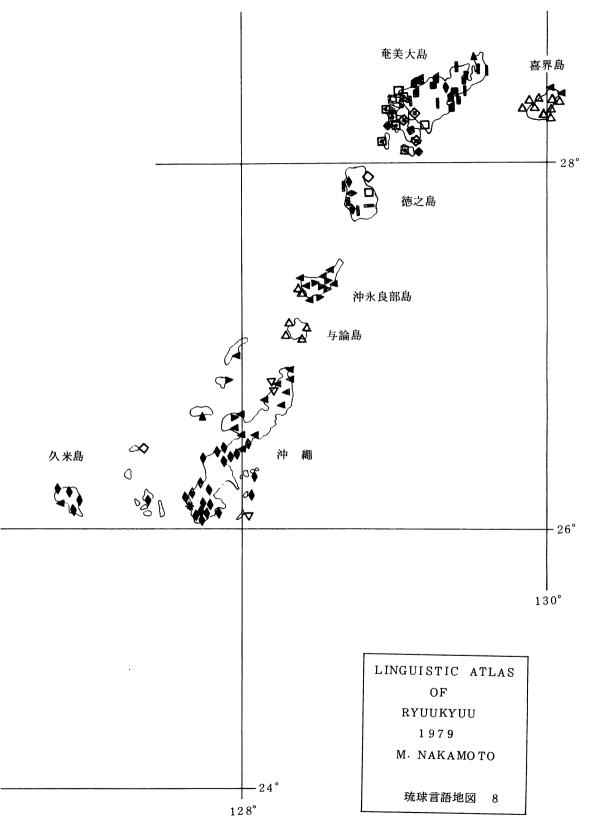
ハゼ系

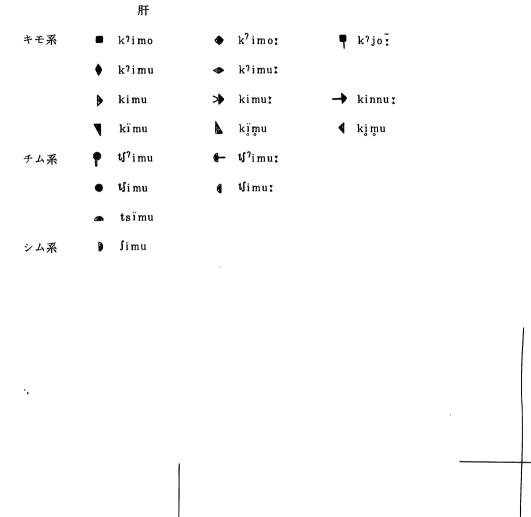
- △ hadi ♥ hari
- 🛦 hadzï 🧸 hadzi ⊳ hadziː 🛕 hazi

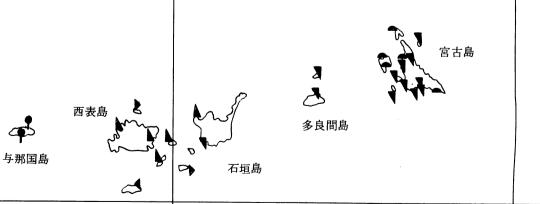
イキ系

¥ 7iki



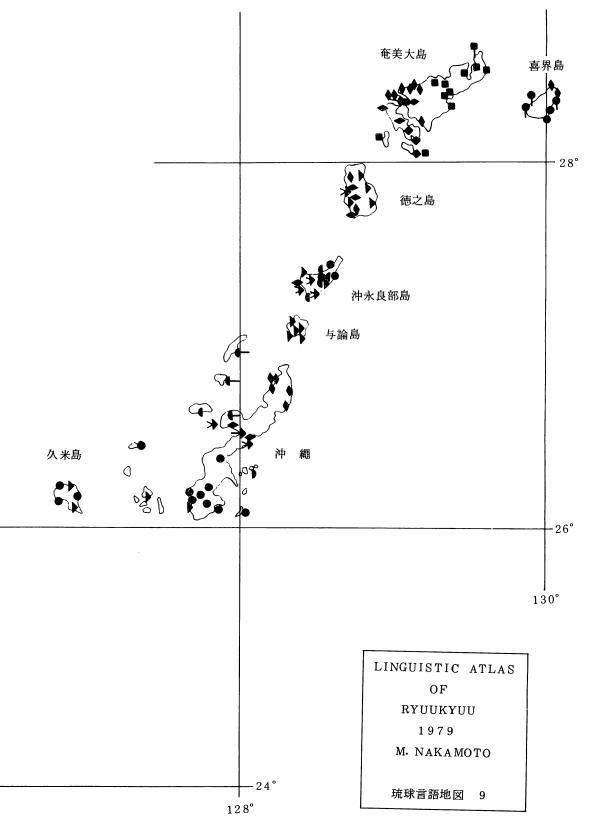




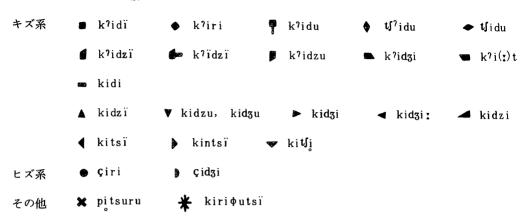


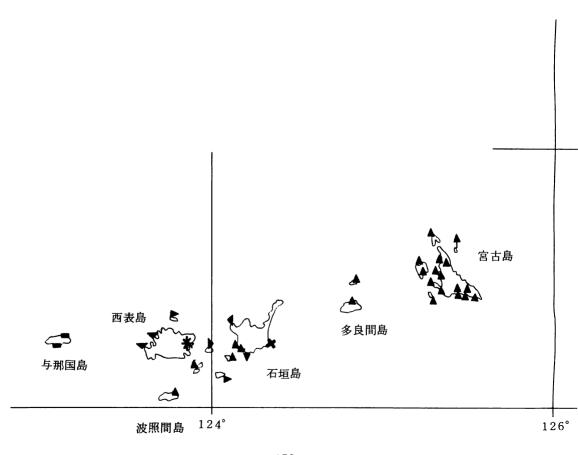
波照間島 124°

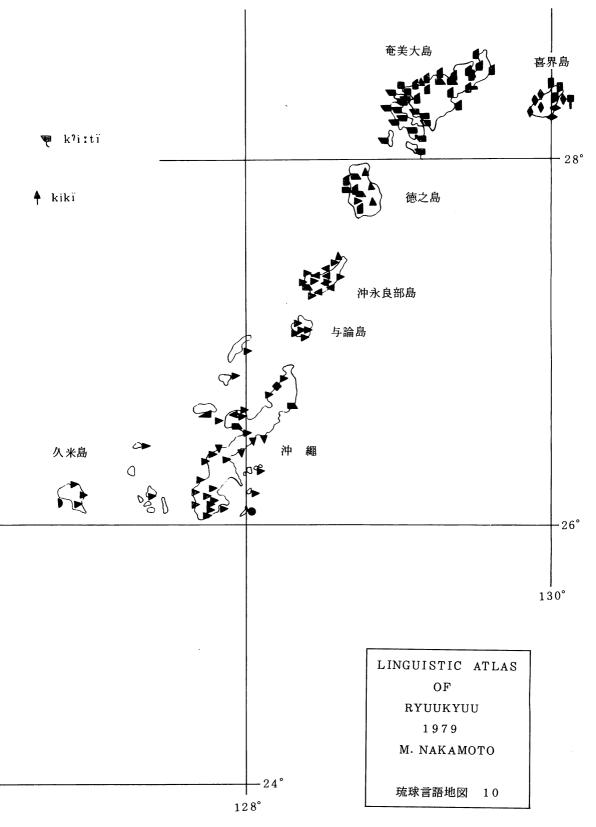
126°



傷

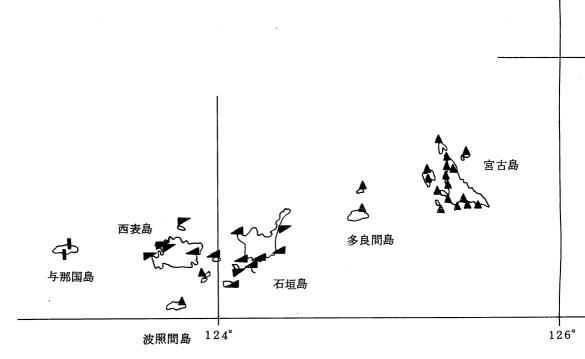


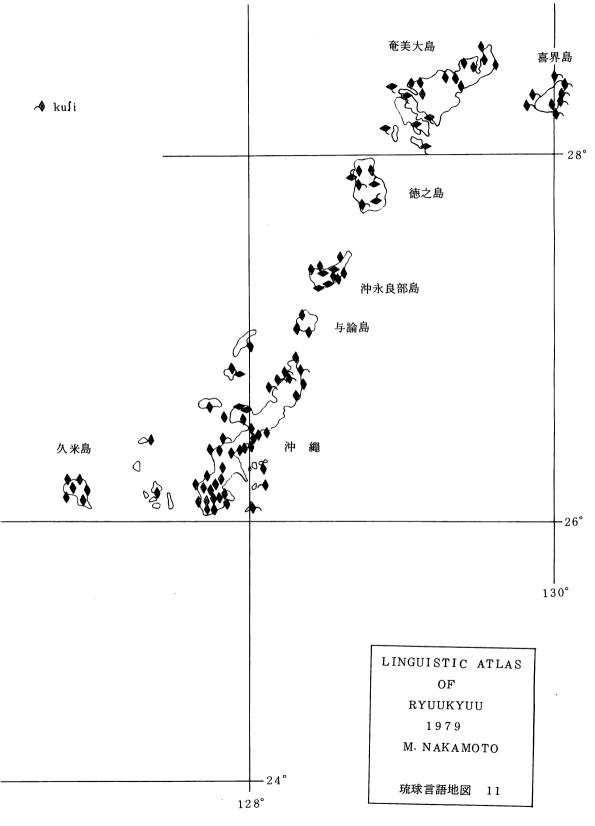


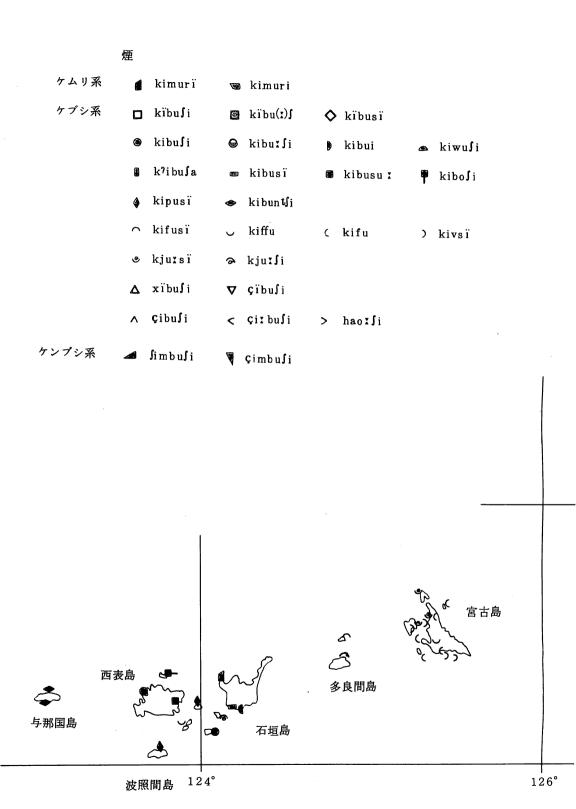


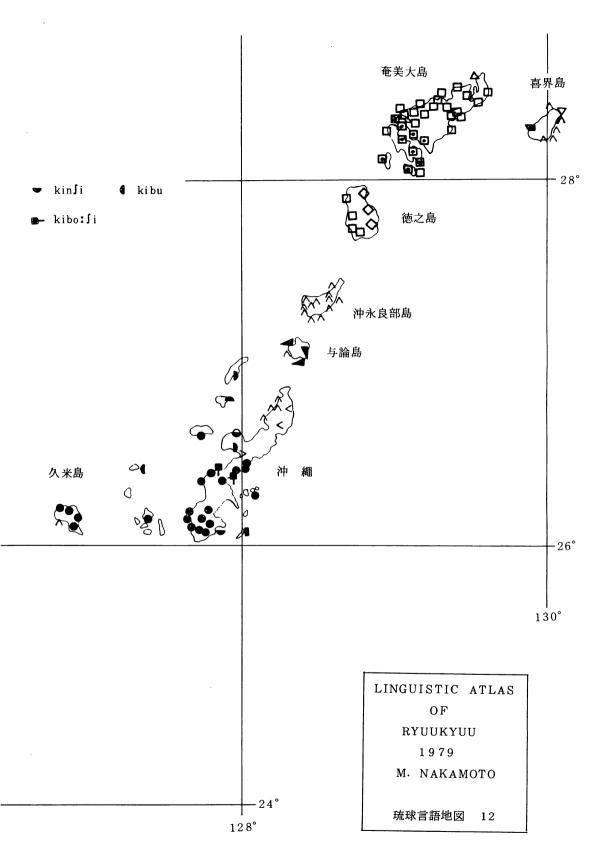
П



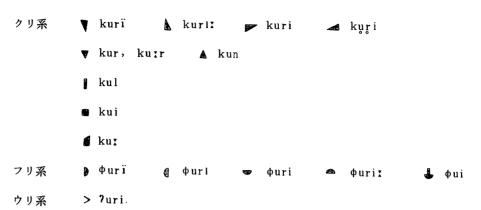


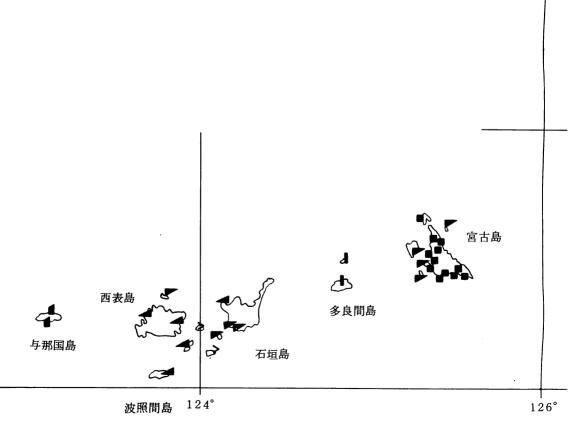


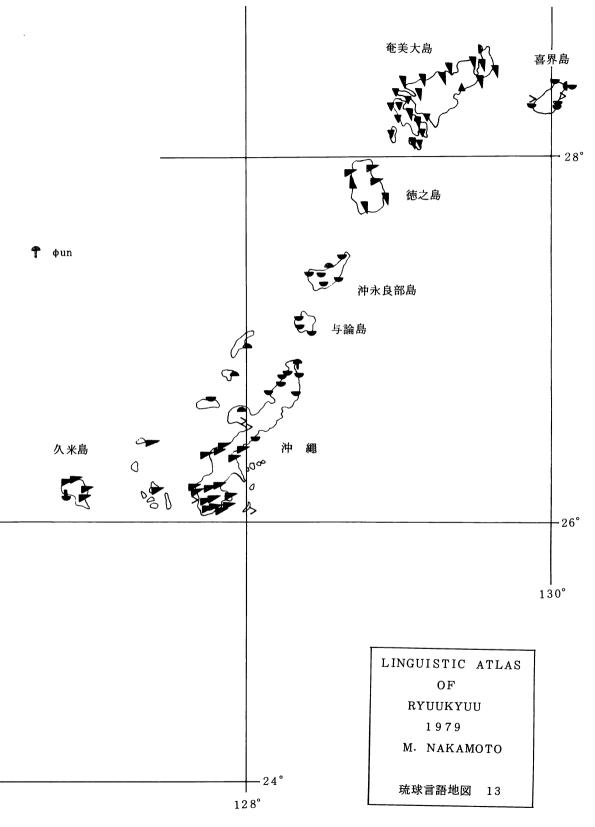




これ

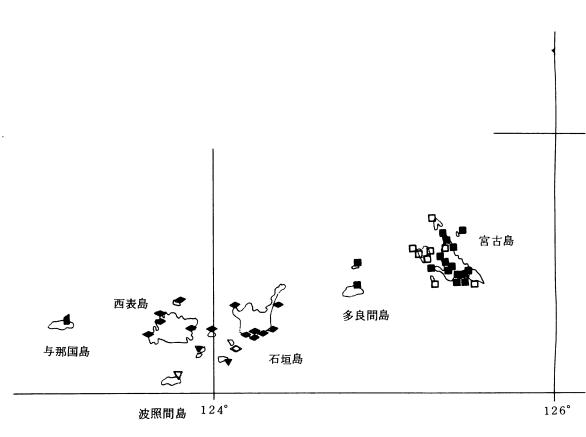


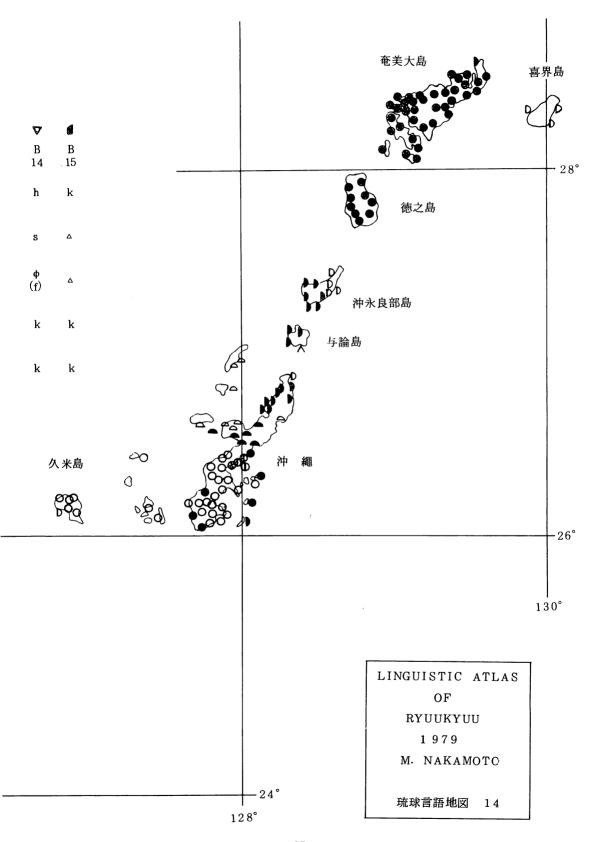




カ行子音の総合図

		0	Φ	•	۵	D	D	^			◆	•	▼
	A 1	A 2	A 3	A 4	A 5	A 6	A 7	A 8	B 9	B 10	B 11	B 12	B 13
ア段	k	k	k	h	h	h	h	h	k	k	k	k	h
イ段	k k ⁷	tʃ tʃ?	s	k k ⁷	tʃ tʃ ^ʔ	k k ⁷	tʃ tʃ ⁷	k k ⁷	k	ts	k	s	k
ウ段	k k ^ን	k k ⁹	k	k k ⁷	k k ⁷	k k ⁷	k k'	k k ⁷	f	f	ф	ф	ф
エ段	k	k	k	k	k	h	h	s	k	k	k	k	k
才段	k	k	k	h	h	h	h	h	k	k	k	k	k

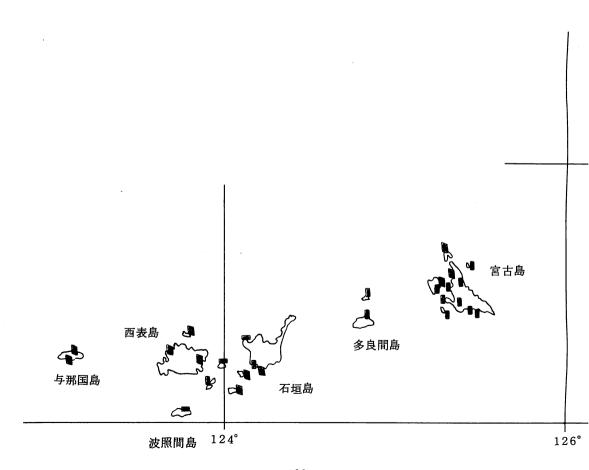


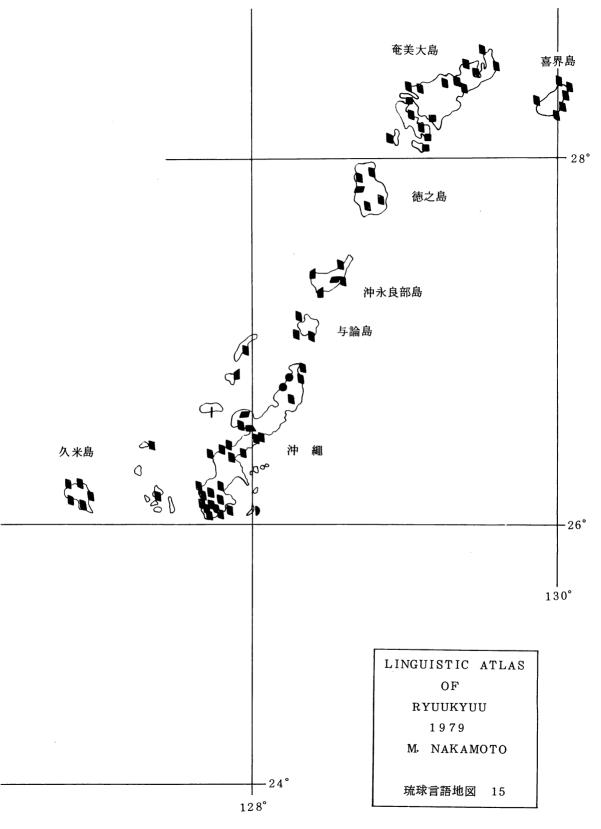


tai

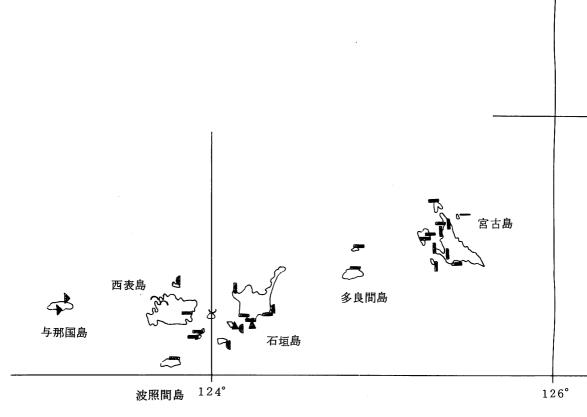
サビ系 😝 sabi 👂 rabi

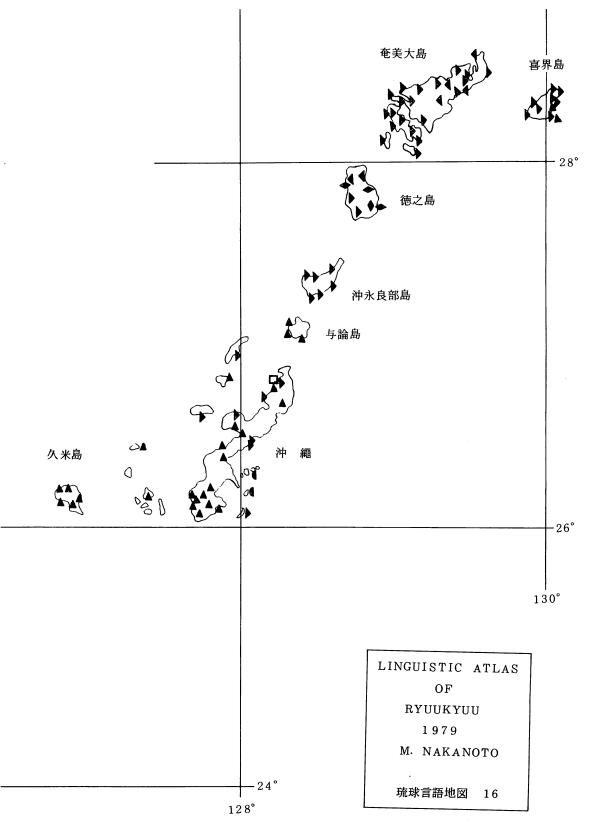
tawi

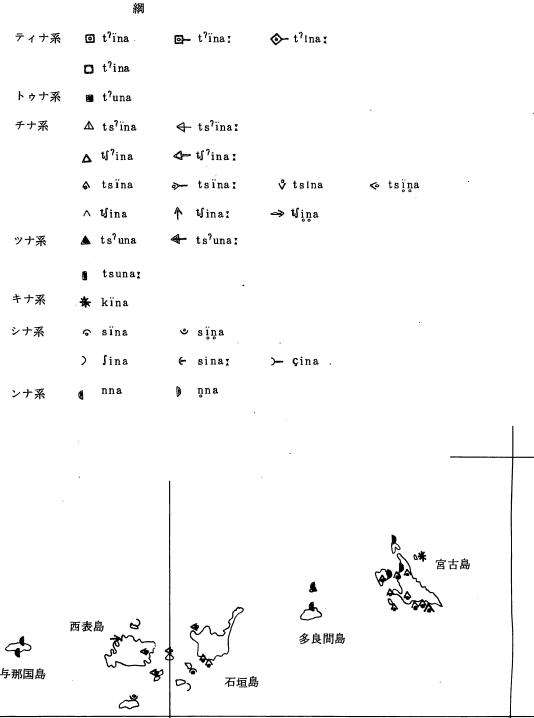




乳 ティー系 🛛 ti 🛚 b t∫⁷i x **∮** Մ'i 系 ▲ tsiː ts³ï ts[?]ïː tsïsï tsïː — kї х シ-系 € Six ツァー系 ∧ Va į̃ → tsaːma



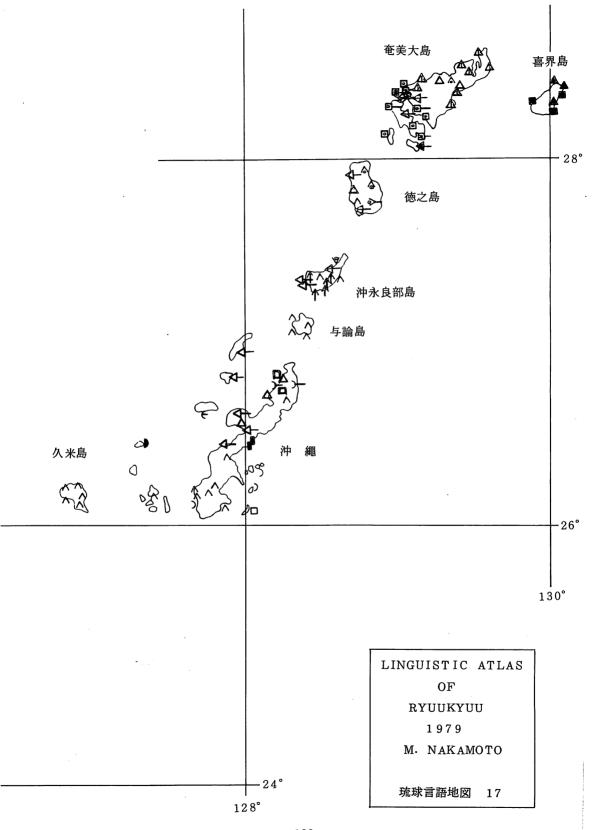




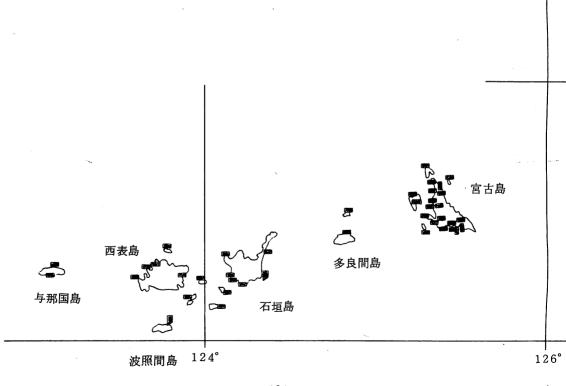
126°

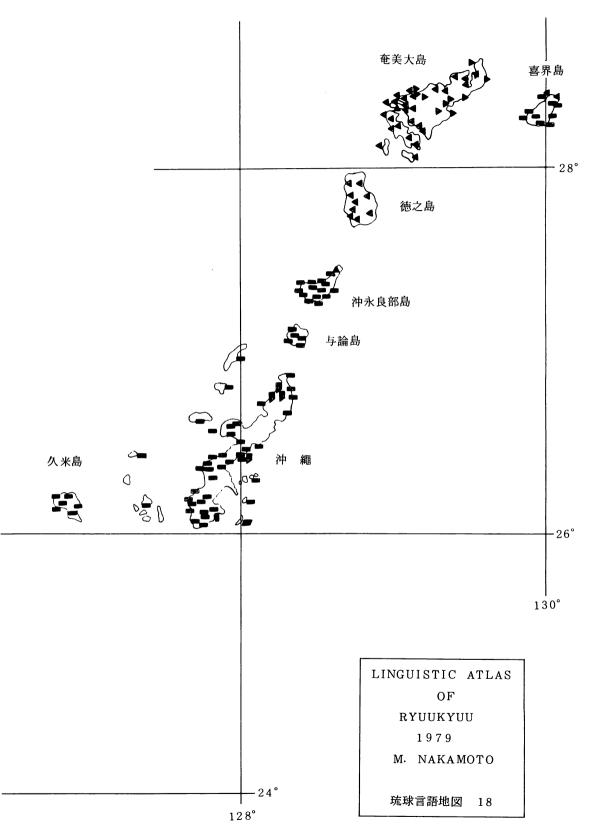
124°

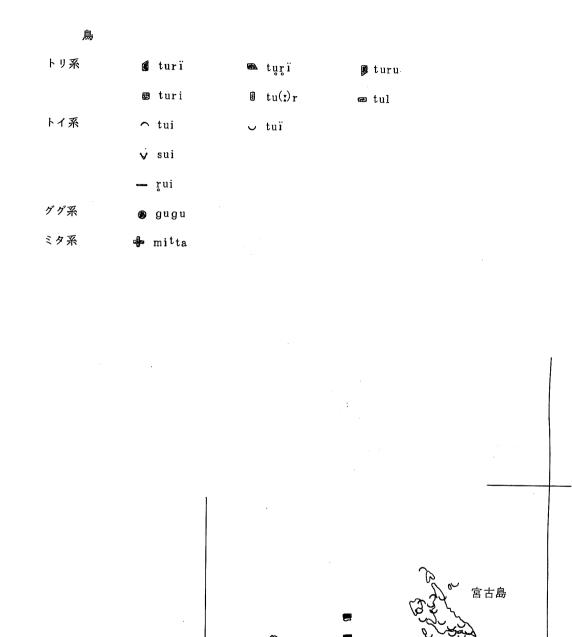
波照間島



手 ティー系 b ti d ti: A ti: A ti: w ti: チー系 b ti: チー系 b ti: シー系 D fi:



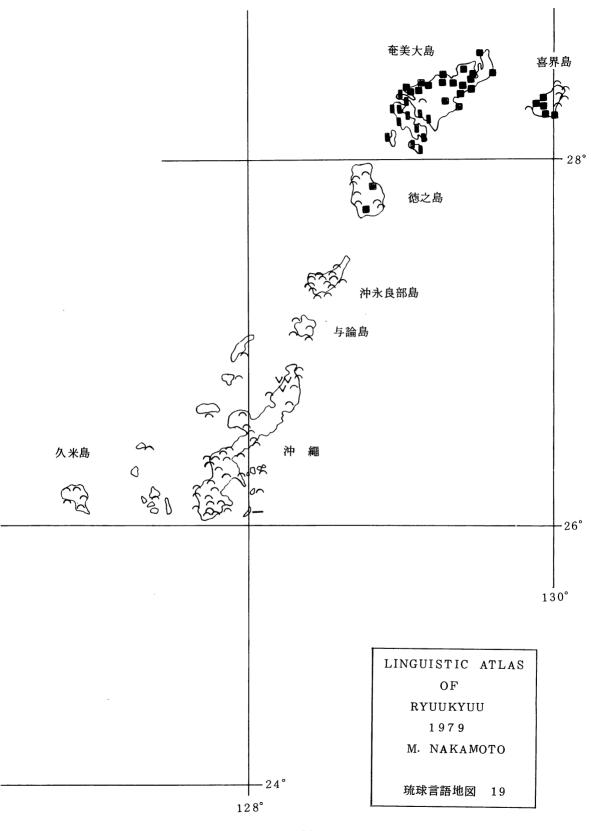




波照間島 124°

西表島

石垣島



タ行子音の総合図

	S A	₫ Δ	∲	® R	9 12:	&		
	1	A 2	A 3	B 4	B 5	B 6		
ア段	ta ŗa	ta	ta sa	ta	ta	ta		
イ段	ស្ ⁷ i បើi	t∫ ⁷ i tsï t∫i	t [?] i ʧ [?] i ʧi Çi ∫i	kï	tsï Ui	tsï t∫i t∫i t∫i sï ∫i		
ウ段	t ⁷ ï t ⁷ ! t ⁷ i t ⁷ u ti tu	ts?ï ts?u tf?i tfi	t?i ts?ï tʃ?i tʃi sï su ʃi	kï	tsï Vi	tsï t∫?i sï su ∫i		
エ段	tï t! ti ŗi	tï ti tji	tï ti ∫i	ti	ti Vi	ti ∫i		
才段	tu ŗu	tu	tu su	tu	tu	tu		
与那国島	西表	A		石	ク 垣島	多良間島	子古島	
		波照間島	124°				126°	

